

研究ノート

日中文化における共通点・類似点・相違点 — 在日30年の中国人である私の日本文化体験記 —

張 興 和

要 旨：

日本と中国の文化交流は長く、同文同種と思われるほど共通点が多い一方、相違点も少なからず存在し、それによる誤解も多発している。しかし、中国と日本にそれぞれ約30年間の滞在歴を持つ在日中国人の一人として、実際にどのように感じ取ったのだろうか。本稿は自ら経験した4つの事例を皆と共有する。

キーワード：箸、漢字、日中文化、ゼミナール、出張講義、東北大学

目 次

はじめに

- 1 一年生ゼミナールによる日中韓の箸に関する研究
- 2 出張講義「日中文化の比較」による市民との交流
- 3 日本語と中国語に使われている漢字の微妙な差異
- 4 同姓同名で時に混乱を引き起こす2つの東北大学

おわりに

参考文献

日中文化的共同点和相似点以及不同点 —— 一个中国人在日居住30年的日本文化体验

张兴和

摘 要

日中和中国的文化交流历史久远，象同文同种一具有很多的相同之处。然而，也存在着许多不同之处、由此产生的误解也时常发生。作为一个分别在中国和日本各居住30年之久的中国人究竟有何感受呢？通过本文作者的4个亲身经历与大家分享。

关键词：筷子、汉字、中日文化、研究班、市民讲座、东北大学

日中文化における共通点・類似点・相違点 —在日30年の中国人である私の日本文化体験記—

張 興 和

はじめに

日本語を勉強し始めた頃から、日本も漢字を使っていることを知り、日本文化に特有な魅力を感じた。1980年代になって初めて、山口百恵・三浦友和主演のドラマ「赤い疑惑」を観た。感動すると同時に、少しでも日本を知ることができた。その時、日本に来たこともなく、日本人に会ったこともなかったので、日本文化に対する理解は、ほんの少しだけの書籍や映画に限られた。

約30年前に期待と不安を抱きながら北京から仙台にやってきて、日本での留学生生活を始め、日本文化を実際に体験することができた。それ以来、在日中国人の一人として、日本と中国のことにより関心を持って考え、日本と中国の相互理解・友好交流を常に願っている。同時に、日中文化を比較しながら、その共通点や相違点の発見を楽しんでいる。

日本と中国は二千年もの文化交流の歴史を持ち、一衣帯水の隣人同士であり、皮膚の色が同じであるばかりでなく、同じ漢字も使っており、文化的な共通点はいうまでもなくたくさんある。しかし、日本と中国には、「似て非なる」ところも多くあり、文化の違いから生じる誤解も決して少なくない。

日中文化の比較に関して詳細な研究が多く行われている¹。相原氏は、中国語の学習・研究に携わってきた日本人、中国人に日本語を教える日本語教師、日本に長く滞在した中国人が、様々な立場で体験した日本と中国の言葉と文化の違いをまとめた。莫氏は日本語に漂う海の匂いから、日中文化の違いを「海洋文化」と「牧畜文化」の違いと結論付けた。陳氏は日本人と中国人を同文同種と思い込む危険を指摘した。

これらの多くの研究は、日中文化の違いを様々な視点から解明し、日中の相互理解に重要な役割を発揮していると思われる。私は言語の専門家でも日中文化の研究者でもなく、このような体系的な研究は到底できないが、中日両国にそれぞれ約30年間の滞在歴があり、自分で感じたことを他人に知っていただきたいと思い、本稿を執筆することにしたのである。

本稿に、少しでも共感していただけたら、無上の喜びである。

1 例えば、相原茂、莫邦富、陳舜臣、王延、安本真弓、在中日本人108人プロジェクト等の研究が参考文献に示されている。

1 一年生ゼミナルによる日中韓の箸に関する研究

食べることは人間にとって欠かせない行為であるが、民族・宗教・地域などによって食事の方法は大きく異なり、世界では3つに分類される。「手食²」は東南アジア・中近東等に集中し世界人口の40%を占め、「箸食」は中国・日本・朝鮮半島・ベトナム等に集中し30%を占め、「ナイフ・フォーク・スプーン食」はヨーロッパ・アメリカに集中し、30%を占めている³。

箸食で使う箸は最初に中国⁴で始まり、日本や朝鮮半島等に伝わって定着したと言われているが、日本や韓国で使っている箸を見ると、形も材質も随分違うし、使い方⁵や置き方も大分異なる。箸はただの2本の短い棒に過ぎないが、本当に奥が深いと感じさせられる。韓国を離れる時に、仁川空港で韓国箸を数種類購入し、大切な記念品としている。

さることはさておき、本学では学生が一年生からゼミナルに所属し、少人数で共同して活動・議論・発表する体験を通じて、コミュニケーション力・考え抜く力・チームワーク力を高めようとしている。私が担当するゼミナルは、「環境経済学」を研究テーマとし、環境問題に興味がある2～4年次の希望者が対象である⁶。

しかし、1年次では教員と学生とのかかわりをできるだけ広くするために、ローテーション方式⁷が採用された。配属された学生は必ずしも「環境経済学」に興味があるわけではない。また、経済学を勉強し始めたばかりであるので、専門的な「環境経済学」を意図的に避け、ゼミ生の興味を優先にした。

数年前に、1年次の学生からなるゼミナル I⁸は、たまたまであるが日中韓三国の出身者から構成された。皆箸に興味があったため、経済学部らしい研究テーマではないが、日中韓の箸に関して研究(図1)を行った。

2 手食は、一番歴史的に古い食法である。行儀が悪いと思う人がいるかもしれないが、実際は考え方の違いだけである。有難い食物を指先から味わう事によって、食材に感謝をする意味が含まれる。また、手食は儀式・宗教を重んじる民族、箸食は繊細かつ神経質な民族、ナイフ食は大胆にして合理的な民族と思われる(<https://eatatefood.com/news/finger-food/>)。

3 金泰虎「日韓の食事作法：作法の相違とその作法形成の原因を中心に」『言語と文化』pp. 99-116 (2007年)

4 中国河南省安陽市の遺跡から発見された青銅製の箸がこれまでに発見された最古の箸であり、3000年以上前に既に箸があったと推測される(<https://zhuanlan.zhihu.com/p/33693978>)。小さな2本の棒に過ぎないが、「はさむ」「つまむ」「切る」「押さえる」「混ぜる」「刺す」などの機能を持つため、食事をする上では欠かせない道具として定着したという(<http://www.wasyokuken.com/konna/hashi03.html>)。

5 国によって箸の使い方が異なるが、日本国内においても箸の持ち方が様々であるようである。目白大学谷田貝公昭教授による大学生を対象とした調査結果(1997年)では、箸を正しく使っているのは29%と低い(適菜取著『箸の持ち方 人間の価値はどこで決まるのか?』フォレスト出版(2014年) p. 74)。

6 「環境経済学」を研究テーマとし、2年次では環境経済学入門書の勉強、3年次では環境経済学の視点から身近なごみ問題を考え、4年次では環境と経済に切っても切れないエネルギー問題を取り上げる。

7 後期の前半(第1回～第7回)と後半(第8回～第14回)は、まったく異なるメンバーである。

8 ゼミナル I (2018年度入学、担当期間：後期第8回～第14回)は、日吉悠月君、坂井里緒君、呉相燁君、岡田光清君より構成された。



図1 箸に関する文献検索・箸での豆摘み速さ実験・発表用PPT作成

中国箸は竹製や木製⁹が伝統で、長く太いのが特徴的である。中国は大家族文化であり、大勢の人が食卓を囲んで、離れた場所から料理を取ってくるのが一般的であるため、長い箸が必要である。そして、肉文化の中国では、箸先を尖らせる必要はなく、箸の端から端までほぼ同じ太さとなっている。

日本箸も中国と同じく木製である。しかし、日本では料理は最初から取り分けられ、箸を伸ばす必要がないので、中国箸よりかなり短い¹⁰。また、日本は魚文化なので、魚の骨を掴みやすくするように箸先が尖っている。

一方、韓国箸は日中とは違い金属製である。歴史上でいろんな原因¹¹で金属製になったと言われているが、金属製だと焼き肉やキムチによく適していると考えられる。日本のようには取り分けられていないが、中国ほど大人数でテーブルを囲むことはないので、日中の中間程度の長さである。

このようにして、日中韓各国の箸の形状や材質の違いは、各国の食文化の違いによるものと考えられ、これはゼミナールの共通の認識となった。ゼミ生は、このような違いを認めながら、各種類の箸を用いて、緑豆を摘む速さを測る実験を行った。その結果、やはり使い慣れた箸が一番使いやすいと結論付けた。最後に、調査や実験をまとめ、パワーポイント（図2）と豆摘み速さ実験を撮影した映像を用いて、1年生ゼミナール合同発表会で発表した。

9 銅や銀などの金属製、象牙製、磁器製などもあったが、竹製や木製が主流である。竹製や木製は素材が豊富で、手触りが良い特徴があるが、吸水性によりかびやすい欠点があるので、近年、プラスチック製、チタン製、ステンレス製、合金製も増えつつある。

10 実際箸の長さが様々である。現在、中国では24～27cmが多く、日本では22cm程度のものが多いようであり、長さには1割程度の違いがあると思う。

11 韓国では、毒に触れると変色する銀の箸が宮廷で広く用いられていたという説がある。



図2 ゼミ生が作成し発表に使用したスライドの3枚目(お箸の歴史)

「日・中・韓 お箸の違い」を題にした発表の冒頭ではテーマ設定の理由として、「日・中・韓三方国が集まったゼミであり、三方国に共通しているものは何か考えました。「お箸」が一番身近なところで共通しているので、歴史や食文化の違いについて、皆さんにも知ってもらえればと思い、今回のテーマとしました。」と述べた。

続いて、箸の歴史、日中韓各国の箸の特徴、持ち方の違い、それら特徴や違いの形成要因を説明した後、各国の箸を用いた緑豆を掴む速さを測る実験の映像を見せた。発表の最後には、以下のように語った。

「使ってみての感想として、やはり自国の使い慣れている箸が一番使いやすいです。同じ国から伝わった箸ですが、それぞれの国の文化に合わせて、進化していったことを改めて実感しました。」

「偏見だけで好き嫌いの判断をしてほしくないです。文化の違いがあるから、それぞれマナーやルールも違ってきます。日本で当たりまえとされていることが他国では非礼にあたることもあります。そんなことを考えるきっかけにできれば良いかなと思います。」¹²

限られた5回だけのゼミで行われた研究なので、それほど深い研究に達せず、厳密さが欠けて熟考に耐えないところさえあるかもしれないが、各国の食事の方法や箸の使い方の交流を図り、互いの理解が深まることで、コミュニケーション力の向上につながったのではないと思う。

このようなグループワークでは、自分がいなくても成立するからと思い、作業をサボる「ただ乗り(フリーライダー)」現象が発生する場合がある。しかしこのゼミナールでは貢献度に差があるものの、資料調査、実験計画、緑豆の用意と実験、発表用PPTファイルの作成を、皆が協力して行い、最後に一緒に発表した。指導教員の私はほとんど口を出さずに、ゼミナールの一員として参加しただけであった。

この1年生ゼミナールによる日中韓の箸の比較研究に関して特筆に値するのは、その当時、富良

12 研究期間は2018年11月8日～12月6日の5回のゼミであった。1年生ゼミナール合同発表会は2018年12月13日に開催され、張ゼミナールIの学生全員が登場して発表した。

野から電車利用で通学する日吉君のすでに重い荷物に、この研究のために追加された、大きさも重みもあるノートパソコンが、資料検索やパワーポイントファイル作成に大きな役割を発揮し、今記憶に尚新しい。

箸についてゼミ生諸君から多くを学んだ。韓国箸はステンレス製だから、重い、滑る、熱伝導しやすいと思い込んでいたが、実際に使ってみると、意外に軽く、滑らず、熱くならないことが分かった。空洞かつ真空で、箸の先端に滑り止め構造が付いているからである。かつ耐久性が高く衛生的であると思い、それがきっかけで韓国箸を愛用している。

2 出張講義「日中文化の比較」による市民との交流

旭川大学は「地域に根ざし、地域を拓き、地域に開かれた大学」との建学理念に基づき、地域の高校生や、新たな情報・知見を求めて生涯学習を希望する社会人、退職後にさらに学びを深めたいと考えるシルバー世代の人たちのために、幅広い分野にわたり、「高校生と生涯学習のための出張講義メニュー」を提供している。

私は、「エネルギーと環境問題」、「地球温暖化」、「クリーン開発メカニズム」、「エネルギーの本質」、「数学の面白さの再発見」等、専門関連のテーマのほかに、在日中国人として常に考えている「日中文化の比較」というテーマも取り上げている。

2020年より、新型コロナウイルス感染症¹³拡大防止のため、出張講義がほとんどできない状態が続いているが、今までは出張講義が留萌市や富良野市にまで及んだ。毎回、勉強熱心な高齢者に感動され励まされる。大学の授業と重なるため、出張講義を辞退せざるを得ないことも度々あり、大変申し訳なく感じた。新型コロナが一日も早く終息することを願いながら、出張講義を再開することを楽しみにしている。

さて、私が提供したテーマの中で、専門的なものよりも、趣味的な「日中文化の比較」が一番人気であった。これは、日中文化に関心を持つ方が多いことを示している。

講義の最初に、「本日のテーマは『日中文化の比較』ですが、まず、『文化』とは何でしょうか？どんな話を期待されているのでしょうか？」と問いかけるのが一般的である。異文化、食文化、箸文化、漢字文化、農耕文化、牧畜文化、日本文化、文化人、文化財、文化遺産などのようにほぼ毎日使っている単語であるが、一旦「文化とは何か？」と聞かれると、正確に答えるのは、実はそれほど簡単ではない。

13 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は、2019年末に世界で最初の患者が報告されてから瞬く間に世界中にパンデミックが広がった。北海道内で初めて患者が確認されたのは2020年1月28日であり、感染拡大を抑えるため、2020年2月28日に北海道鈴木知事が「新型コロナウイルス緊急事態宣言」を発表した。現在「密閉・密集・密接」という3つの密を回避する状態が続いているが、アルファ株、ベータ株、ガンマ株、デルタ株、…、オミクロン株と変異しているので、その拡散の懸念が依然として残っている。

『デジタル大辞泉』¹⁴によれば、「文化」とは「人間の生活様式の全体。人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。」である。一方、小室¹⁵によれば、「文化」は多義性を持ち、人の手が入っていない純粋な自然を除いた人工物は、物質性・普遍性を持つのが「文明」であるに対して、精神性・個別性を持つのが「文化」であるとされている。

いずれにせよ、「文化」の意味の範囲が極めて広く、時には曖昧さがあり、人によって理解が異なる場合もある。そんな幅広いテーマ「日中文化の比較」の中で、皆知りたいだろうと思い、かつ私が知っている内容に絞らなければならないが、もっとも身近な「漢字」と「生活」関連が定番になっている。

日本語も中国語もともに漢字を使っている共通性があるが、日本語は表音文字のひらがな・カタカナも使っているに対して、中国語は漢字のみである違いがある。受講生のほとんどは中国語の「ニーハオ」しか知らないが、「收音機、打火機、便利店、口香糖、生魚片、電腦、熱錢、袋鼠¹⁶、…」を日本語に、「アルコール、スーパーマン、ホワイトボード、ハードディスク、ドライクリーニング、アコーディオン¹⁷、…」を中国語に訳する課題がほぼ完璧にできる。

日本人は中国語の漢字の読み方が分からなくても、見るだけで言葉の意味をある程度読み取れる。また、表音文字であるカタカナで表している外来語は、日本語がわからない中国人なら当然その意味が分からないが、漢字に直せば、中国語に変身し、日本語がわからない中国人でも、ある程度の意味を理解できる。意味を形にした表意文字である漢字の凄さを感じさせられる。

一方、日本と中国の間に生活習慣の違いが確かに多いと実感している。例えば、日本と中国は同じ箸を使っているが、箸の長さも置き方も異なっている。日本では出された料理を客が食べ残すと美味しくないと感じたと思われ、ホストに失礼な行為になる。逆に、中国では客が料理を食べ尽くすと量が不十分で満足してもらえなかったと思われるので、ホストの面目が丸潰れになってしまう。

その他にも、食事・宴会のマナー、贈り物のタブー、挨拶の仕方、お礼の言い方、電話のかけ方、タクシーの乗り方、手数字の表し方、……。

「日中文化の比較」の出張講義では、以上のような日頃の生活シーンをクイズ形式で尋ねると、聴講者は、正解する時は嬉しい表情、不正解の時は悔しい表情を見せながら、興味津々に答えてくれた(図3)。想定内のことではあるが、正解は毎回少なかった。正に日本にとって、中国は近くて遠

14 小学館、デジタル版(電子辞書)

15 小室敬幸「文化とは何か?」<https://note.com/kota1986/n/n1b790abd07ec>

16 收音機(ラジオ)、打火機(ライター)、便利店(コンビニ)、口香糖(ガム)、生魚片(刺身)、電腦(パソコン)、熱錢(ホットマネー)、袋鼠(カンガルー)

17 アルコール(酒精)、スーパーマン(超人)、ホワイトボード(白板)、ハードディスク(硬盤)、ドライクリーニング(乾洗(乾式洗濯))、アコーディオン(手風琴) 18 専門指導員松原博子先生より提供して下さった、2017年7月25日東鷹栖公民館しのもめ百寿大学講座「日中文化の比較」の様子の写真である。

い国である。



図3 出張講義「日中文化の比較」でクイズ中¹⁸

「食事の食べ残し、挨拶の仕方、贈り物のタブーなど日本との感覚の違いに驚かされました」、「文化の違いが生活様式の変化をもたらすことが具体的に理解できた」、「近くて遠い感覚があった中国という国を身近に感じることができました」、「中国のような広い国での生活実態については、一度その土地を訪問する以外につかめないことがわかる」とか、講義後に聴講者から様々な声を聴かされた。

3 日本語と中国語に使われている漢字の微妙な差異

表意文字である漢字は、蒼頡という4つの目がしている賢者によって発明されたと伝えてきた。漢字の作り方は、象形(例:日、川、木)、指事(例:上、本、天)、会意(例:明、林、品)、形声(例:河、榆、蚊)の4つに分類される¹⁹。時代の流れにつれて、甲骨文字、金文、篆書、隸書、楷書、行書、草書、明朝体などのように変化し、さらに、漢字の簡略化²⁰が進められ、様々な書き方を経て今日の字形にたどり着いたと考えられる。

いうまでもなく、漢字は日本語と中国語の最大の共通点である。「日本語には漢字が半分占めるから、日本語は半分の外国語だ」と評価されたことがある。頑張ったつもりでもなかなか上達でき

18 専門指導員松原博子先生より提供して下さった、2017年7月25日東鷹栖公民館しののめ百寿大学講座「日中文化の比較」の様子の写真である。

19 漢字が視覚的方法と聴覚的方法とを上手く利用して作られた。視覚的に作られたのは象形、指事、会意、転注で、聴覚的に作られたのは形声、仮借であり、合わせて「六書」という。転注とはある漢字の意味を他の意味に転用すること、仮借とは該当する漢字がない場合に同音の他の漢字を借りて用いることであるので、転注と仮借はあくまでも文字の使用範囲を広げた方法に過ぎず、新しい文字を作り出さない。漢字を実際に作ったのは象形、指事、会意、形声の4種類の方法である。莫邦富著『鯉と羊 日本と中国、食から見る文化の醍醐味』、海竜社(2009年)、pp.161-164。山口謡司『漢字はすごい』、講談社(2013年)、p.66。

20 香港や台湾では依然として正体字(繁体字)を使っているが、日本では1923年に「新体字」と簡略化し、中国では1964年に「簡体字」と簡略化した。なお、シンガポールでは1969年に独自の簡体字を使ったが、1976年に中国と同一の簡体字を採用した。

ない日本語学習者として、日本語がそんなに軽視されると不服ではあるが、中国語も日本語も共通の漢字を使っていることは確かである。

日本で使っている漢字のほとんどは中国から伝わったもの²¹であり、その中で「日本」「中国」、「人」「牛」、「山」「川」、「花」「豆」、「月」「星」のような漢字は、日本語においても中国語においても、形・意ともに同じである。このような字なら、中国人あるいは日本人は、相手の言語が全然分からなくても、字を見るだけで意味は通じる。

しかし、日本と中国の漢字の中には微妙に差異があるものがある(図4)。例えば、「単」や「残」は、日本語の漢字は一画多いが、「圧」や「収」は、逆に日本語は一画少ない。また、「骨」や「天」は見た目では同じではあるが、よく観察すると少しだけ違いがある。ところで、なぜこんな違いが生じたのだろうか。

中国	单 残	压 收	骨 天
日本	単 殘	圧 収	骨 天

図4 中国語と日本語にある漢字の微妙な差異

ここでは、「天」という漢字の微妙な違いを取り上げたい。日本語の漢字の「天」は明らかに一画目(上の横棒)が長い。一画目が短いことに慣れた中国人は、日本語を書く時、ついうっかりして一画目を短く書いてしまい、当然、日本語の先生からは間違いと判定されることがある。逆に、日本人が中国語を書く時も同様であるだろう。漢字が苦手と思われる欧米人でも正確に書ける漢字を書き間違えてしまう。

白川氏²²によれば、「天」は象形文字であり、手足を広げた人を正面から見た形の「大」の上に、大きな「頭」をつけた形である。頭が人体の一番上にあることから、「天」を意味するという。図5に示すように、従来の「頭」を表す丸は、現在は上の横棒「一」に変形²³したという。しかし、同じく「頭」を表す横棒なのに、なぜ日本は中国より長いのだろうか。

21 日本発祥の漢字も数多くある。山口⁸⁾によれば、国字(和製漢字)は千五百以上に及ぶという。私を知る限り、国字の一部、例えば「腺」「癌」「畑」「鱈」が中国に伝わって使われている。しかし、その多くは日本特有の地理・文化・風習面を表すものであり、例えば「峠」「岬」、「鯛」「鯉」、「驥」「神」「櫛」である。これらは中国に伝わらず日本に留まっている。また、日中の中等教育教科書(理科・社会科)の語彙調査によると、頻出度の高い3000語の中で90%以上の語彙の意味が一致する。このような共通語彙には、青年、朋友、建設、解放などは中国語を典拠にしたが、企業、金属、反応、形成などは日本語を典拠にしたと言われている(斎藤敏康「中国語と外来語—モダン上海の西欧語受容—」『中国語検定協会・中国語学習者の集い』2011年)。残念ながら、私が一番感銘した「大根」という語彙は中国語には入らなかった。

22 白川静『常用字解(第二版)』、平凡社(2003年)、p. 506。

23 JapanKnowledge「第14回 人の形から生まれた文字〔2〕人を前から見た形」
https://japanknowledge.com/articles/kanji/column_jitsu_14.html (2021. 10. 23閲覧)



図5 象形文字「天」に頭を表す「丸」の「横棒」への変形

これについて、ある日本語の先生からは、白川氏と全く異なった解釈を聞いたことがある。先生曰く、天は地上を覆う上空であり、「天」の上の横棒こそ上空を表するものだ。日本は国土が中国より遥かに狭いから、その分、上空が大きく見えるのだ。ゆえに、「天」という漢字が日本に伝わってきた時、上の横棒が伸ばされたのである。蒼頡の本意に沿わないかもしれないが、納得できる解釈と言えらう。

4 同姓同名で時に混乱を引き起こす2つの東北大学

初対面の講義でパワーポイントを使って講義する場合は、よく図6に示す写真を見せながら、「この大学はどこにありますか？」と発問する。私の日本語の発音は、初めて聞く人にとって聞き取りにくいだろうと自覚しているので、時間が許す限り、長めの自己紹介をして、私の声に聴き手が慣れてもらってから、本題に入るようにしている。



図6 中国の東北地方にある瀋陽市に位置する東北大学

この写真を見せるのは自己紹介の一歩である。東北大学なら当然仙台にあると断定し、何も疑わずに「仙台」と答える方がよく現れるが、実はこれは中国の東北地方にある瀋陽市に位置する中国の東北大学である。1923年に創立され、迫力を感じる巨大な看板「東北大學」は、日本でも知られ

ている、元学長である張学良氏²⁴の筆跡であるという。

文化大革命（1966～1976）直後の1977年に、中国で大学入学全国統一試験が復活した²⁵。10年間受験できなかった社会人から現役高校生までが一斉に受験した²⁶。予備試験で受験者数を570万人に絞った上で、合格者数を計画の20万人より約27.3万人に拡大（35%アップ）したが、受験者の合格率は4.8%であった²⁷。私は運が良く21人の中の1人となり、文革後1期生としてこの東北大学に入学した。

入学後、授業前には教室前方座席を先取る争い、授業中には膝の上で必死にノートを取る姿、学内停電時²⁸には氷雪に覆われた構外の歩道を占領し薄暗い街灯下で本を読む人だまり、8人部屋で4年間共同生活していた年齢も経歴も様々の7人の仲間が、強く印象に残っている。教室も教科書も教員も食事²⁹も足りない時代であったが、失われた時間³⁰を取り戻そうと、皆が寝食を忘れるほど、むさぼるように勉学に取り組み、最高の充実・幸せであった。

現代の学生はその当時のことを信じがたいが、当時の学生も、授業中に出席³¹を取らなければならぬ時代が来ることが予想できなかったはずである。教員として学生に勉学をさせるためには、興味を持たせることが最も大事であることを理解し、それを目標にして努力しているわけであるが、この経験からは、「勉学禁止」も有効な方法ではないかと考えたこともあったのである。

この大学入学全国統一試験の復活、及びそれがもたらした中国社会への深刻な影響は、「高考1977」³²と映画化され、2009年に上映された。30年前に発生したあの信じがたい出来事は、現世代人の眼前に再現され、大きな反響を巻き起こしたわけである。正にその映画ポスターに書かれたよう

24 張学良氏（1901～2001）は1928年8月に東北大学学長を兼任し、東北大学を興すため、父親からの遺産の一部を東北大学に寄付した。また、1993年4月に招聘を受けて東北大学名誉学長になった。（中国の東北大学のHP、<http://www.neu.edu.cn/2019/0126/c15a2/page.htm>）

25 1977年8月13日～9月25日に、全国高等学校学生募集に関する会議が北京で開催された。会議では教育部の「1977年高等学校学生募集に関する意見」を採択し、1977年から大学全国統一試験制度を回復することを決定した。この決定は、10月12日に国務院に批准され、10月21日に『人民日報』でトップニュースとして発表された。わずか2か月ほどの後の12月に全国で試験を迎えた。出典：「1977年に鄧小平氏が如何に高考を回復したのか」。

26 「全国統一試験」と言いながらも、実際は各省が独自に出題し、試験時間も各省ごとに数日間ずれたこともあった。本当に統一したのは「募集と採用」であった。ここでいう「一斉に受験した」は、「10年間以上の受験生が同じ1977年12月に試験を受けた」ことを意味する。

27 「1977年に鄧小平氏が如何に高考を回復したのか」、「高考40年を振り返って 制度を变革し初心が変わらず」、中国総合研究センター『平成22年版 中国の高等教育の現状と動向』（2010）p.5。

28 瀋陽市に位置するこの東北大学の学生の行動が市の電力管理部門を感動させたため、東北大学を計画停電区域から除外したということを知ったことがある。

29 必需品が極めて欠乏する時代であり、食糧も食糧配給切符（糧票）で制限された。当時は、食糧浪費や肥満症・メタボリックシンドロームを見たことがなく、不満を言う声を聴いたこともなく、皆が希望に満ち溢れていた。現在は、必需品が溢れ、食糧浪費や肥満者がともに約3割にも上る一方で、鬱病で悩まされる人が増えていることを耳にする。今日になっても理解できず、本当に今昔の感に堪えない。

30 競争が激しかった全国統一試験で選ばれた入学者ではあるが、10年も前に卒業した本当の高卒者や、その後の名前だけの高卒者の集まりであるので、入学時点の学力は極めて低く、中卒レベルにも及ばない者が大勢いたと私はそう見積もる。

31 技術の進歩による出席の取り方の進化を感じる。点呼や出席票記入式は淘汰され、バーコード・QRコード・ICカード・携帯電話を利用した出席システムが導入される大学が増えている。入・退室の2回取りにより、出席・遅刻・早退・欠席の区分で出席状況が記録される。

32 映画名「高考1977」は「1977年に行われた大学入学全国統一試験」の意味である。

に、「特殊年月内の激情燃焼、時代転換中の人性回復」³³である。

それはさておき、次に図7の写真を見てもらいたい。これは仙台にある、東北大学の片平キャンパスの正門（西門）³⁴の写真である。小さくて古い看板は、歳月の流れを訴えているように見える。それを拡大したものを看板の右に表示しているが、まったく同じ「東北大学」の文字が刻まれていることがわかる。



図7 日本の東北地方にある仙台市に位置する東北大学

1992年に、私はこの東北大学に留学に来た。文豪魯迅³⁵先生がその前身である「仙台医学専門学校」に留学したことがある。その後の1907年に創立され、日本初の「女子学生」がここで誕生したことや、金属分野の研究の最先端を走っていることで知られている。また、中国の東北大学の姉妹校でもあるので、留学先の選択に迷わなかった。

この東北大学に到着すると、日本の映画で見慣れた林立する高層ビルにある豪華なオフィスや、赤いプッシュ電話機は全然見えず、あの正門と同様に古い建物（1930年に建てられた3階建ての「一号館」、私が在籍時に天井落下・雨漏りが発生）にある研究室に入ると、すぐ目に入ったのは黒いダ

33 映画ポスターの原文「特殊年月里的激情燃焼 時代転折中の人性復蘇」の訳文である。映画ポスターの写真：<https://image11.m1905.cn/uploadfile/2009/0416/093010250.jpg> (2021. 11. 28閲覧)。

34 数年前に撮影する時は閉鎖され、歩行者や自転車のみが出入りできる状態になった。この門は1925年に御影石で建造され、街の中心部の方向と違って西の方向に開かれているのは仙台城を意識したためだと言われている。また、報道によると、文化審議会は2021年7月16日にこの正門を登録有形文化財として新たに登録するよう文部科学大臣に答申したという。

35 魯迅 (1881. 9. 25～1936. 10. 19) は1904年に仙台医学専門学校の最初の中国人留学生として入学した。東北大学片平キャンパスの正門（西門）に入ると右側に魯迅の塑像が立っている。「魯迅の階段教室」と呼ばれる「仙台医専六号教室」には、魯迅と藤野厳九郎先生の写真が掲げられている。東北大学史料館にある魯迅記念展示室には、成績表など数多くの資料が展示されているが、藤野先生が朱筆で添削した魯迅の解剖学受講ノートが最も印象的である。魯迅の小説『藤野先生』に「我が師と仰ぐ人のなかで、彼はもっとも私を感激させ、もっとも私を励ましてくれた一人だ」と書かれてあるが、この添削ノートを見るだけでも、そのように感じられた。

イヤル電話機であった。日本に来る前に持っていた華やかなイメージと全く異なった。しかし、日本の澄み切った青空や新鮮な空気に惹かれ、環境問題の研究に特に興味を持つようになった。

当初の留学目的は工学部金属系の鉄鋼技術を学ぶことであったが、研究方向を鉄鋼製造技術から環境問題に変更した。幸運なことにここで、何名かの著名教授の指導を受けることができ、まずは、工学的な手法で、後に経済学の視点から環境問題の研究を13年間続けることができた。

両東北大学の教育や研究には様々な違いがあるが、両大学ともに私の人生を大きく変えた。中国の東北大学は、実は合格通知書から初めて知った大学である。地元の師範大学³⁶物理学専攻を志願したが、重点大学合格ラインに達したため、優先権を持つ重点大学³⁷である東北大学に入ることが許された。そこでは、聞いたことさえない「製鉄³⁸専攻」を学び始め、学問の世界を覗けるようになった。日本の東北大学に入ると、研究が環境問題や経済学の領域まで拡がり、視野が一層広くなった。

さて、常に思うことであるが、このように名称が全く同じ大学は、世の中にほかにあるのだろうか。大学時代の母校と大学院時代の母校が、ともに東北大学と呼ぶ。しかし、実際は国籍も設立年月日も異なり、完全に別々の大学である。自己紹介等で両大学に触れる時は、大学の名前に無理にも中国や日本を付け加えないと、誤解による混乱を引き起こしてしまう場合がしばしばあった。

おわりに

長年日本滞在の中国人の一人として、自ら感じた日本と中国の文化の共通点・類似点・相違点の中から、一年次のゼミ生が行った日中韓の箸の比較研究、出張講義「日中文化の比較」、日中漢字の微妙な差異、名称が全く同じ2つの東北大学という4項目を選び、説明を行った。

本稿に挙げた、日中韓の箸を熱心に研究したゼミナール I の学生諸君、出張講義に協力して下さった各公民館・大学・高校の担当者、日本と中国の漢字の不思議な違いを納得できるように解釈して下さった日本語の先生、私の人生を大きく変えた東北大学たちに、深く感謝の意を表す。

また、本稿の作成にあたっては、日本の東北大学の先輩である本学経済学部安藤均教授より貴重な助言を賜ると共に日本語校正を頂いた。ここに深く感謝申し上げたい。なお、本稿中にある誤りや異なる見解をご指摘いただけると幸いです。

36 師範大学とは教員養成を目的とする大学であり、日本の教育大学に相当する。

37 国務院が批准した教育部の「1977年高等学校学生募集に関する意見」に、「重点大学が優先的に採用する」と規定しているという。

38 鉄鋼は強度が強く加工性に優れるなどの特徴があるため、「工業の米」と言われるほど、ものづくりに欠かせない重要な材料である。銑鉄はその初期段階の製品であり、それを生産するプロセスを「製銑」（高炉などで鉄鉱石を還元して酸素と不純物を取り除く）と呼ぶ。当時、中国の粗鋼生産量は3千万トン余り（当時日本は約1億トン）しかなかったが、2020年には10億トンも超え、世界全体の56%を占めた。

参考文献

- 1) 相原茂編著『日中は異文化だから面白い 言語と文化のプロたちが綴るエッセイ集』、現代書館 (2016年)
- 2) 莫邦富著『鯉と羊 日本と中国、食から見る文化の醍醐味』、海竜社 (2009年)
- 3) 陳舜臣著『日本人と中国人 ―“同文同種”と思ひ込む危険』、祥伝社 (2016年)
- 4) 王延「日中文化比較論 ―類似と相違の探究―」『地域政策研究』6 (3) pp.127-133 (2004年)
- 5) 安本真弓「日中文化の相違に関する一考察 語用論の立場から」『高千穂論叢』49 (3) pp.19-32 (2014年)
- 6) 在中日本人108人プロジェクト編『在中日本人108人のそれでも私たちが中国に住む理由』、阪急コミュニケーションズ (2013年)
- 7) 金泰虎「日韓の食事作法：作法の相違とその作法形成の原因を中心に」『言語と文化』pp.99-116 (2007年)
- 8) 山口謡司『漢字はすごい』、講談社 (2013年)
- 9) 白川静『常用字解 (第二版)』、平凡社 (2003年)
- 10) 中国総合研究センター「文革後の高等教育制度の回復期」『平成22年版 中国の高等教育の現状と動向』(2010年)

参考したホームページ

- 1) 劉海峰「1977年に鄧小平氏が如何に高考を回復したのか」<https://zhuanlan.zhihu.com/p/27435020> (2021. 11. 28閲覧)
- 2) 劉海峰、劉亮「高考40年を振り返って 制度を変革し初心が変わらず」『中国教育報』(2018年6月14日付)、人民網 (people.com.cn) (2021. 11. 28閲覧)
- 3) 任仲倫「高考1997」ポスター、<https://image11.m1905.cn/uploadfile/2009/0416/093010250.jpg> (2021. 11. 28閲覧)